

東日本大震災により日本中が未曾有の国難に陥っています。1990年に日本経済が最高潮に達して以来、20年間日本経済の成長はなく、2010年には国内総生産における世界第2位の座を中国に追い抜かれました。この20年間は失われた日本の時代と呼ばれ、日本の底力は発揮できずに長期低落化の道を歩んでいました。ガンバレ日本経済というかけ声も日本人の魂には全く響かず、失われた20年の間に外国から「もう日本は終わりだ!!」「日本人は不甲斐ない」「今までの日本は偶然の産物だった」と言われてきました。もう日本には、経済を再生させる底力がなくなってしまったのではないかと日本人自らも自信を失っていました。

2011年3月11日に突如、東日本全域が大震災にみまわれ、多くの人命が奪われ、経済の生産基地が打撃を被りました。奇しくも1991年2月バブル崩壊が始まって20年目の出来事でした。今、東日本大震災により「ガンバレ日本!!」「日本の底力を示そう!!」「日本は一つ!!」「日本人の心を一つにしよう!!」「日本人の絆!!」「日本は負けない!!」「助け合って日本をみんなで再生しよう!!」という**挙国一致のスローガン**が叫ばれ、日本の再生ムードが著しく高まっています。

私は、ふと40年前の学生時代に読んだルース・ベネディクト(人類学者)の「菊と刀」(The chrysanthemum and the sword: Patterns of culture)を思い出しました。菊と刀は「日本人の二重人格(?)」を論じた研究書で、ベネディクトはアメリカが日米戦争中と戦後の日本支配を目的に書かれた日本人及び日本文化の研究書です。

日本人は礼儀正しいと言われる一方で、不遜(ふそん)で尊大であり、また固陋(ころう:古い考え方に固執すること)であると同時に、新しい物事への順応性が高い民族である。さらに、美を愛し菊づくりに秘術を尽くす一方では、力を崇拝し武士に最高の栄誉を与える。それは欧米の文化的伝統からすれば矛盾であっても、菊と刀は一枚の絵の二つの部分である。民族の志向と感性から出た行動には必ず一貫性があるというベネディクトの文化統合形態の理論に、ベネディクトの直感的な人文学的才能がプラスされ、欧米人による日本文化論として評価された。(出典: Wikipedia)

東日本大震災によって、日本人の民族固有の特性(長所や短所)が浮き彫りになりました。戦後のアメリカによる日本弱体化政策とそれに便乗した人々による戦後教育によって歪められた日本人の国家意識や日本の文化が目覚め芽吹いてきました。

菊と刀で述べられているように、「日本人の優しさ、助け合いの心、礼儀正しさ、地域の絆の強さ」という「菊」に象徴される面と「日本人の団結心、1つの目標に向かう猪突猛進力」という「刀」に象徴される面の両極端な面が、東日本大震災の対応にも現れています。この2つの面を併せ持つ文化は、西洋を始め他の国には理解されない「日本民族」の生い立ちから生まれたものです。日本人は器用に相反する精神を使い分ける民族でした。しかし、「菊」の面を巧みに利用し戦後アメリカは日本での占領政策を進め、日本人をアメリカにとっていい子、素直な子、抵抗しない国民に育て上げたのです。一方、「刀」の面を排除するため徹底的に平和主義という国際社会で通用しない概念を押しつけ、日本人を骨抜きにして従順な国民に育てました。

さあ、日本人はここで目覚めて日本人の固有の特性である「菊と刀」を、日本の発展と世界の平和のために使おうではありませんか!!日はまた昇る日本の時代の実現を!!

(株)ダイナミックマーケティング社⁺
代表 六 車 秀 之